

＜日本イギリス哲学会 第68回関西部会例会 報告要旨＞

報告1：『リフォーマー』における「改良」論

——エドモンド・バークと18世紀のダブリナーズ——

藤原 いお

本報告は1740年代ダブリンの演劇論争の文脈を再構築し、18世紀中葉のアイリッシュの言論における趣味改良論の様相を明らかにする。

「ジェントルマン論争」は、プロテスタント利害を代表する劇場支配人とカトリック利害を疑われた観劇者との乱闘に始まり、様々な論点を巻き込みつつ40年代ダブリンの一大論争となった。本論争については、2003年のH・バークの緻密な調査による研究書があるが、これを基とした思想史的研究はI・クロウを除いて見られない。そこで本報告では、彼らの研究蓄積を活かし、論争の当事者らが「陣営としてどのような対抗関係にあり、何を話題として、どういった系譜の語彙を用いて語ったか」を再整理する。この整理から、趣味改良論がアイルランドに特異な問題に沿って論じられたことにより、イングランドとは異なる政治的言説を構成していたそのあり方が示される。

まず、論争に関わったT・シェリダン、C・ルーカス、P・ヒファーン、E・バークら四陣営の小冊子を分析し、論争の中核的課題として宗教対立、階級対立、アイルランドの自律性の問題等の要素を析出する。また、各陣営の利害対立と各話題に関する主張の対立点とを確認し、18世紀中葉のアイリッシュの「愛国」のあり方の多様性が、趣味改良論にいかなる形で表出されていたかを提示する。

次に、なかでも複雑な立場を有するバークらの小冊子、『リフォーマー』における王政復古期演劇批判を、名誉革命後のイングランドの風俗改良論と比較し、両者の語彙やレトリックの共通性と、批判の宛先の違いを明らかにする。特にバークらの主張に見られる「公共精神」と「敏待」の区別に着目し、これを当時のアイリッシュにおけるイングランドへの対抗意識の表れとして考察する。以上のように、歴史的な文脈の中に『リフォーマー』を置き、そのアイルランド性を分析することで、バーク初期思想の新たな面が明らかになるだろう。

(京都大学・院)

報告2： アダム・スミスの尊厳論

山本 陽一

本報告では、アダム・スミスの尊厳論について、St. ダーウォルの所見を手がかりに考察する。人間に尊厳を認める規範的要請の根拠は何か、尊厳の核心的内容は何かという二つの問題のうち、本報告はおもに後者に関連する。

ダーウォルによると、尊厳は、自己保存を妨害するような行為（侵害、侮辱）について、責任を問い、それに答える道徳的地位を相互に承認するところに成り立つ。そこにおける尊厳の規範的根拠は、相互承認である。また、そこで問われる責任は、侵害に対する償いであり、贖罪である。罪の本質は尊厳の否定であり、尊厳の回復には、加害者による罪の自認が必要である。しかし、処罰は不要である。

以上のダーウォルの見解について、少なくとも以下の二点を指摘できる。第一に、スミス自身の責任の概念は、ダーウォルの理解よりも広いということ、第二に、尊厳の内容として「自己保存」だけでなく、「自己尊重」も含まれるということである。

第一の点について。ダーウォルによれば、尊厳の回復には罪の自認で足り、応報的処罰は不要である。ここにみられる責任概念は、スミスが論じる法的責任よりも狭いと思われる。スミスは、非難されるべき過失がなく、罪がない場合の贖罪についても、公平な観察者の論理を使う。スミスの立場は厳格責任主義であり、過失責任主義ではない。後者の場合、不運な被害者が「社会の一般的利益」の犠牲になり、その尊厳が回復しない。

第二の点について。ダーウォルは、自己保存の権利を守る「正義」に着目するが、それだけでは尊厳の内容として不十分であると思われる。ダーウォルは、尊厳が自己と他者に対する尊敬を要求するという。しかし、『感情論』第6版で導入された *self-estimation* の概念が、ダーウォルのいう *self-respect* にあたるのかどうかは検討されていない。このスミスの語は多義的であるが、検討される必要がある。それによって、自己尊重、それと不可分な「慎み」 *modesty* の重要性が明らかになる。

(香川大学)

報告3： アダム・スミスの手紙

——『イギリス思想家書簡集 アダム・スミス』（篠原久・只腰親和・野原慎司訳、名古屋大学出版会、2022年）をめぐって——

篠原 久

翻訳の底本となった（モスナー、ロス編）『アダム・スミス書簡集』第2版（1987年）では、スミス発信書簡191通、スミス受信書簡130通が含まれているが、今回の邦訳書はそのうちスミス発信書簡全191通、スミス受信書簡17通（および第三者間書簡3通——そのうち2通は『書簡集』以外の資料から引用——）を採録したものである。

「報告」では邦訳書であらたに構成された全10章の内容を紹介したあと、若干のコメントを提示することになる。全10章のタイトルと4点のコメント（感想）の表題は以下の通りである。

第1章「学生および教授としてのアダム・スミス」、第2章「貴族の子弟教育」、第3章「『国富論』の形成」、第4章「スコットランド関税委員就任」、第5章「出版業者宛書簡」、第6章「アダム・スミスからの紹介状」、第7章「『道徳感情論』の展開と第6版に向けて」、第8章「アダム・スミスによる既刊書の回顧と未完の著作への言及」、第9章「デイヴィッド・ヒューム宛書簡」、第10章「文人、政治家、若き世代、その他宛書簡」（その他「付録」として、アダム・スミスの後任者問題3通、『道徳感情論』初版と『国富論』初版への反応全7通が含まれている）。

コメント1「教え子に関するスミスの性格描写にみられる《二組の資質》のバリエーション（長所と短所）」、コメント2「終の住処をめぐるヒュームとスミスの意見の相違にあらわれた両者の《礼節（politeness）》論」、コメント3「母親の死去と《ストア的無感動》批判」、コメント4「ヒューム『自伝』に付したスミスの《公開書簡》の位置づけと、ヒュームの遺稿『対話』の《出版問題》に関するラスムセンの新説をめぐって」。

（関西学院大学名誉教授）